201—④　　地域交通史の諸問題

琉球大学　　正　上間清
(株)中央運輸コンサルタント　正　○比嘉定吾

§1　交通史研究の背景と必要性

昨今土木界においても、単なる正史趣味からではなく，土木工学・技術の成果としての土木施設環境の質的あり方を問う立場から，正史的あるいは文化的考察を経た対象へのアプローチが強調されるようになった。その時代的背景としては、昭和30年代の社会・経済的体験と40年代の反省の上に形づくられた、人々の自らのアイデンティティーを求める思潮、表現をかえれば、価値観・生活観の個性化、地域化の傾向が強まったところにあるかと思われる。土木界もこれらの思潮を受けて、土木環境施設が単に経済活動の支えとしての機能ばかりでなく、文化的遺産として存在しうる条件についての関心の高まりも近年顕著になって来た感がある。学会における計画学研究の進展の中にその傾向をみることができるし、景観工学への関心の高まり、土木史研究会の発足などは先に述べたような時代背景を受けて顕在化したともいえよう。また近年の各地における地域の自然的、文化的特性つまり地域アイデンティティーを前提にした地域の開発構想および計画策定の普及もまた同様な時代意識の中で生まれて来たものといえよう。

このような傾向は、社会資本開発の公共計画の進展についてかなりの遅れをとった沖縄県においても、過去10年の「較差是正」策による急進展の経験を経て、より顕著な形で意識されはじめている。

本県は、目下次の10年間をカバーする地域振興開発計画の策定に向け，鋭意努力がなされつつあるが、これに関連した調査研究も各分野でなされつつある。筆者らも幾人の調査研究に携っているが、それらの内容が、以前に比較して、正史的・文化的特性の規定とその計画への導入要請の傾向が強まっている。

以上のような状況は、土木の分野においても地域史，地域の文化史への関心の高まりを醸成しており、その調査研究は急務である。これまで問題を特に交通に限定せず述べて来たが、土木施設の中で、人々の日常生活の主要な構成要素である交通施設においては、これまで述べて来たことからはより強調された形で要請されている。昨今、期せずして同一レベルで同時期に沖縄の交通を正史的にみようとする調査研究が進められているがあながら偶然とはいえず、時代的背景をうけての現象と理解したい。

§2　地域アイデンティティー，その土木環境への環元のプロセス

もし土木史なり交通史なりの考究の要請が、以上に述べたような、土木環境における地域アイデンティティーの付与というニーズを背景にもつとするなら、それは必然的に、正史なり文化なりの土木環境への還元のあり方について問うということになろうかと思う。還元の過程の終盤では、それは必然的に形態化＝デザインの問題に至るものでなければならないだろうと思われる。しかしながら、正史や文化の認識のあり方は多分に個性的傾向をもつものであり、この形態化の内容を未方書的に規定することはかなりの困難を伴うものと思われる。これらの問題点を理解しつつも、土木環境形成のプロセスにおける、正史的，文化的考察の必要性の出現とその対応および還元の一般的プロセスを試みに示したのが図—1である。この図では、正史あるいは文化研究も、何らかの形で土木環境への反映、あるいは還元という前提で描いてあるものの、土木史なりが常にそのようなかたちの関心のみで考究されるべきものではないこと、すなわち正史学という立場から正史プロパーの諸課題の考究も必須であることは、当然のことながら理解を深めなくてはならないものと考える。

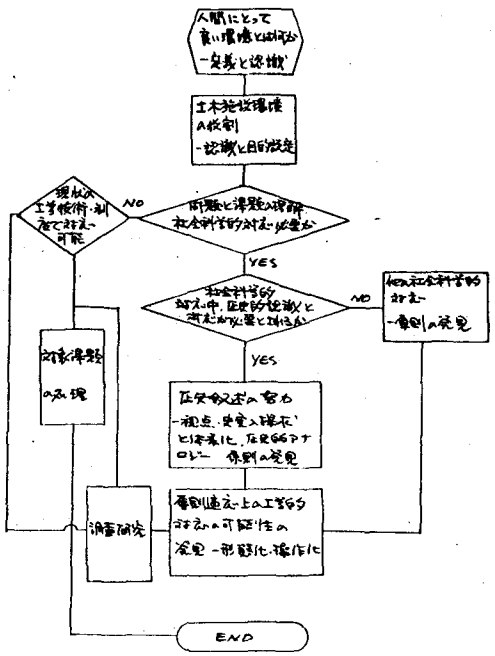
§3　沖縄交通史研究上の諸問題

筆者らは現在、沖縄交通史の一環としての陸上交通史の考察を進めているところである。細部の史実に関する説明は省略するが、陸上交通史の叙述にあたって主要な事項について、筆者らの検討の結果を以下に述べる。

①　視点の問題：「正史を書きかえる」という言葉がある。このことは、いわゆる正史というものをどういう

角度－視点－からみるかによって、正史叙述、すなわち客観的存在としての史実の解釈なり体系化が異なったものになりうることを表わしているものと思われる。自然科学や工学の立場と異なり，対象の客観化に多くの風聞をもつといわれる正史（学）の状況下で、土木あるいは交通史を考究する立場（視点）はどのようにおえるべきかについて筆者らは論議を重ねたが、十分な結論を得てない。しかし当面§1でおべた時代的背景を念頭におき、成果の環境形成への還元というより現実的な対応を考えることの必要性を認め、より広い概念をとらえて環境論的公共福祉という視点を一応考えるものとした。

② 時代の区分：正史の叙述において、その対象となる時代をどのように区分するかという問題は史家の間では基本的論争のある分野である。何をメルクマールとして区分するか、例えば、制度の面からみるか、社会における階級の生成か　といった指標のおき方で、時代の区分が変ることになる。地域交通史の場合では、交通機関の発達とするか、あるいはその背景としての政治、経済の推移の立場から考える方極々変型の分かれるところかと思われる。論議を重ねる中で、当面，通史的な交通史を目指すこととして、わかりやすさ，対比の容易さの点から一般史にみられる区分を参考に，黎明期～廃藩置県、明治期、大正～昭和20年、米軍支配時代（昭和20年～47年），および復帰以後（昭和47年～）の5期に区分することにした。



図－1　土木環境課題と対応

③ 交通研究史：筆者らの調査の範囲では、交通に関しては、交通史そのものをとりあつかった研究書は極めて少なく，主なものは琉球王朝時代の南方貿易の研究に関連した海上交通史（例えば「黎明期の海外交通史」）が主なものであり，陸上交通についてはその名を冠した著書は見当らない状況にある。交通機関の発達，鉄道建設，道路建設等につき断片的に叙述されたもの、あるいは論文等は散見されるが、体系的記述の試みはなかったようである。

④ その他重要な課題：以上のほか、沖縄の地域陸上交通史叙述にあたって，より注意深い考察論考が必要と思われる課題を列挙すれば次のようなものが指摘できよう。

i) 地域交通史全体の中における陸上交通の地位の明確化，ii) 本土，中国など沖縄史をとりまく影響圏の交通の発達状況との比較，iii) 各時代の交通政策，制度，iv) 建設技術の推移と交通環境の変せん、v) 本島内の地域較差の明確化，vi) 近代道路網形成における本土の交通政策および復帰後の政策との関連
vii) 自動車依存型の交通環境形成の要因，viii) その他

§4　おわりに

近年の社会的背景をふまえ、沖縄地域の陸上交通史の考察の論についた筆者らの関心事項について、2，3の基本的事項につき考察を試みた。まだまだ多くの検討事項を残したままであるが，他地域の地域史等の成果も調査し、広い視野からの考察の必要性を痛感しているところである。

参考文献　例えば(1)黎明期の海外交通史（東恩納寛淳）(2)正史の深度（神山四郎）(3)沖縄県の正史（新里ほか）(4)論集沖縄近代史（西里喜行）(5)土木計画学の領域と構成（土木学会）など．